礼文島 縄文遺跡から プチホテルまで

巖谷　國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彥論コレクション』全５巻。夏にはまた道央を中心に旅した。

連絡船は稚内港を発って北進し、野寒布(のしゃっぷ)岬をまわって西へ向うと、そこからはもう北日本海である。小雨まじりの曇天のせいか、甲板に出てくる人はほとんどいない。海は灰色でやや波立っている。６月なのに風が冷たい。肌に触れるこのひんやりした感じがすでに懐かしい。

やがて利尻山（利尻岳、利尻富士）が見えてきた。山腹には白雲の帯が水平にかかり、その上に残雪の筋が何本か走っているが、山頂は霞んでいて見えない。下は裾野が黒々となだらかにひろがっていて、島にそびえる山というより、大きな山そのものが海上に生えているかのようだ。標高1721メートルといっても文字どおり海抜０メートルからなので、かなりの高山ということになる。

利尻島はアイヌ語のリーシリで、ずばり「高山の島」の意だが、礼文の語源レプンシリは「沖の島」を意味する。利尻島のほうが大きく、北海道本島から近く、島間は８キロだから、地図上では斜めに隣りあって見える。そのため「利尻・礼文」と兄弟のように並記されがちだけれど、実際は似ても似つかない。地形や地質も風土もまったく違う。以前に二つの島を周遊したとき、そのことに驚いたものだった。

利尻島は2000万年ほど前にできた円形の火山島だが、礼文島ははるかに古く、１億5000万年ほど前に隆起した島である。南北に細長く、二本の触角の生えた虫のような形をしていて、山はあっても最高峰が標高490メートル。あとは丘陵が多く、どちらかというと平たい印象のある島だろう。

稚内から60キロ、船で２時間かかる。島の東南にある香深(かぶか)港に着いたのは昼すぎだった。さっそく近くの「礼文町郷土資料館」へ行ってみる。入口に巨大なトドの剥製があり、島のあちこちの美景や、丘陵に自生する花々の写真パネルが並んでいるが、私は「船泊(ふなどまり)縄文遺跡」の展示室へ直行した。今回の旅の目的のひとつは、島の縄文人の生活を垣間(かいま)見ることだったからである。

船泊遺跡の出土品

この島へ来たのは20数年ぶりだった。前回は島めぐりのあと、船泊港に近い「プチホテル・コリンシアン」に投宿し、生涯最高かと思われる生ウニの美味に感動したことなどを、『日本の不思議な宿』（平凡社刊／のちに中公文庫）という著書に記したところ、主人夫妻との文通がはじまって、土地の海産物を贈られ

礼文島への連絡船から利尻島をのぞむ。
撮影：筆者

たり、著書を贈ったりしてきたものだが、５年前にめずらしく電話があり、近くの縄文遺跡の話を聞いたのだった。

最近、3500年以上前の船泊遺跡の出土品が重要文化財に指定されたのを機に、北海道大学の専門家だけでなく、カナダの考古学者まで調査に来ているという。とすれば、かつてシベリアからアラスカに渡って新大陸の先住民になった人々と、同じくシベリアから南下してきた縄文人との、血縁にかかわる何かがあるかもしれない、等々、いろいろと興味をそそられる話題だった。

つづいて送られてきた『北海道船泊遺跡出土品』（礼文町教育委員会刊）という図録にも惹かれた。船泊に縄文遺跡のあることは知っていたが、1616点におよぶ出土品のカラー写真がめずらしく、実物を見たい気持がおこった。礼文島ならばあの美しい自然とも再会したくなる。生ウニについては、持病のせいで禁じられてしまったけれど、ほかの海産物にはまたありつきたい。妻にそんな話をしたところ、こんどは同行する、生ウニなら２人分まかせてほしいというので、再訪の機がようやく訪れた。

郷土資料館はさほど広くないし、出土品の展示数も限られていたが、パネル写真のおかげで臨場感があった。まず発掘時の人骨の写真。合計28基もの墳坑のうち「23号墓」のもので、老年の女性の遺体だったらしいが、胸の前で両手・両脚を折ってちぢこまっている姿は子どもみたいにも見えて、哀愁と微笑を同時に誘う。手首と足首のまわりに、ビノス貝の殻を丸く削って孔をあけた「平玉」と呼ばれる小さな装飾品が散乱している。これらは紐を通してブレスレットやアンクレットにしていたものだ。

もうひとつ、頭蓋骨の頬のあたりには平玉よりも大きな長楕円形の石があって、それだけが緑色なので目立つ。すべすべに磨かれて、紐を通す孔が二つと溝がある。「橄欖岩製垂飾」と記されているので、つまり緑色の橄欖岩のペンダント・ヘッドだったということだろう。

これらは墓の副葬品なので、生前に使っていたものかどうかはわからない。それでも、白く光る貝を連ねたブレスレットにアンクレット、緑のグラデーションの美しいペンダントをつけて佇む白髪（？）の女性の姿が思いうかぶ。場所は船泊湾岸の砂浜か、それとも背後にひろがっていたろう森のなかか。

現在は久種湖のあるあたりが川だったようで、両岸には広葉樹の森もあったはずだ。ありあまる貝や果実を食べて暮していただろうこの女性は、この地の生まれなのか、それとも北海道かサハリン（樺太）かシベリアか、あるいは本州の日本海岸からやってきたのか。縄文遺跡の出土品というものには、しばしば広域の地図を思いうかばせるところがある。

船泊遺跡にしてもそうだ。24の墓坑のほかに住居跡８軒と作業所跡６軒、屋外炉87基などが発掘されているけれど、1616点のなかには島の外から、ときにははるか遠方から運ばれてきたものもある。以前に「旅人類」誌で触れた「翡翠製垂飾」などが好例だ。際立って大きいこのペンダント・ヘッドは「７号墓」の出土だが、翡翠は礼文島にも北海道にもない貴石なので、遠く新潟県の糸魚川あたりから海を渡ってきたと推測される。

資料館には石器や土器や骨器のほか、貝の出土品もいろいろ展示されているが、船泊湾に多いビノス貝だけでなく、礼文島ばかりか北海道にも生息しない貝が見られる。文字どおりそのままで宝物にされていた宝

船泊縄文遺跡の「23号墓」から出土した人骨。発掘時の写真をパネル展示している。頬のあたりに緑色の長楕円形をした橄欖岩の垂飾が見える。礼文町郷土資料館。　撮影：筆者

レブンウスユキソウ（礼文薄雪草）。礼文林道にて。
撮影：筆者

貝にいたっては、千葉県以南、日本海側なら山口県以南のもので、主な産地は沖縄や台湾である。柳田国男のいう「海上の道」が、遠く北の離れ島にも及んでいたということだ。

礼文島の面積は81平方キロ強で、東京都なら大田区よりすこし広いくらいだが、縄文遺跡は13箇所もあり、さらに55箇所もの埋蔵文化財包蔵地が確認されているという。まさに「遺跡の島」だともいえる。よほど自然条件にも恵まれていたのだろう。いまとくらべてどうだったか。先ほどの「23号墓」の老女のなじんでいたろう自然界は、なんとなく、現在の礼文島と同じではなかったように思われる。

「花の島」の風土

礼文島の自然には独特の魅力がある。まず花の島としての名声は周知だろう。高山ではない丘陵地や平地にも高山植物（寒地植物）が自生し、５月から８月まで、色とりどりの花を咲かせる。植物相も利尻島と違っていて、それぞれ多くの固有種をもっている。

今回は宿が車を出してくれていたので、「礼文林道」の入口までのぼってもらった。高木の生えていない草地のなかに点々と花が見える。曇天のせいか、かえって花の色が目にしみる。ハクサンチドリの赤、チシマフウロの薄紫、レブンシオガマのピンク、キンバイソウの黄色、エゾイブキの白など。よく知られたレブンウスユキソウ（礼文薄雪草）も白い。どの花も小さくて控えめで、どことなく寂しげに見える。それが風土に似あっているという気がする。

前方には「桃岩」が見えている。かつて西の海岸から見あげたときにはわからなかったが、目の高さだとたしかに先端が桃の形だ。眼下が崖になっていて海がのぞまれる。気持のよい散策コースなのだが、私たち二人は高齢者なので途中までとしておいて、こんどは東岸を車で北上し、いまは僅少になっているらしいレブンアツモリソウ、ついでホテイアツモリソウの咲いている秘所にも行ってもらった。

さらに西上泊（ニシウエドマリ）（ニシウエントマリともいう）と澄海（スカイ）岬の断崖へ。深い入江が曇天の下でも真っ青に見えて美しい。さらに北端のスコトン岬まで行って最北端のトド島を眺め、湾の西岸をくだってアザラシの群れを遠望してから、夕刻、船泊のプチホテル・コリンシアンに到着した。

今回もドライヴをしながら感じていたのは、森がほとんどないということだった。丘陵地には緑の草地や笹原が多く、木が生えていても低木ばかりなので、花々の群生を広く見わたせる。ということは、川の水流にも恵まれているわけで、本来なら森に覆われていてもおかしくはない風土なのに、なぜだろう？

その理由のひとつは西から強風が吹きつけるせいで、低木しか育たないということなのだが、そればかりではない。明治以来のたびかさなる伐採と山火事のために、かつてはあった多くの森が失われてしまったのである。

少なくとも和人のやってくるまでは、ここは縄文人の末裔ともいえる野生の民、アイヌの島だった。ところが明治以後、和人は農地開拓や産業開発のために森を伐り、自称・近代文明への「同化」を強いたのだ。その結果として、いまでは低木と草地や笹原ばかりの島になりはてている。

「花の島」のこの美しい風景に、一抹の寂しさと哀しさがまじるのはそのせいでもある。失われた楽園へのノスタルジアさえ漂う。縄文人たちの見ていた風景はもはやない。だからこそ礼文島は美しくも寂しい、忘れがたい思い出を心にのこすのだろう。

船泊の夕食と夕陽

船泊のプチホテル・コリンシアンは小さな（＝プチ）ホテルというよりも、大きなゲストハウスのような宿である。玄関は靴をぬいであがるスタイルだし、部屋はかわいい家具のそろった洋室で、友人宅に招ば

れたような気楽さがある。主人夫妻もフランクで気どらない。20数年ぶりの再訪なのに「やあ、しばらく！」という感じだった。

建物はその後に増築され、立派な温泉浴場などもできている。客がとみに増加しているので当然のことだという。今日も予約満員である。

島全体では年々むしろ観光客が減っている。それどころか人口そのものが30年前の半分になり、いまは2500人ほどなのだ。面積は先に触れたように東京の大田区くらいあるから、過疎化のはげしさがわかる。縄文盛期のほうが人口が多かったのかもしれない。そこはかとない寂しさの出所はその点にもあるのだ。

そんな寂しさを求めて来る客もいるという。だがこの宿の人気の因はほかにもあるだろう。ここでしか味わえない料理もそれだ。とくに夕食に出る生ウニはとてつもなく旨い。明礬（みょうばん）を入れる前の朝どれのバフンウニをふんわりと盛りつけた一皿は、どうかすると楽園の味がする。

温泉に入って休んでから、まだ明るいうちに食堂へ招かれた。じつは妻の誕生日だと告げてあったためか、まずシャンパーニュが出た。といってもフランス料理ではなく、土地の海産物を中心とした和式フルコースである。献立を記せば、

生ウニ――前回の黒い皿に映えるオレンジ色ではなく、白い鉢にもくもくと盛られている。やはり旨い。たまらなく旨い。だが一口だけにして、あとは妻にまかせた。最高の笑顔を見られた。

ボタンエビとタコとイクラのサラダ――すべて新鮮そのものだから旨いにきまっている。

ホヤ酢――ホヤは好みではないが、旨い。

イカの沖づくり――当然だが旨い。

ここまでが前菜ということだったが、どれも分量が多いので、すでに満腹に近づいている。

するとそのとき、シェフを兼ねている女主人があらわれて、思いがけない提案をした。

「そろそろ夕陽のしずむ時間です。海に出てみませんか！」

フルコースの途中で外出とは異例の提案だが、ことわる客がいるはずもない。裏からサンダルで出て緑の草地を歩く。曇天ながら空に薄いピンクがまじり、懐かしいような切ないような気分が湧いてくる。

泊り客たちのシルエットのほかには人影ひとつない。イングマール・ベルイマンの映画にでもありそうな光景だ。小高い丘にのぼると視界いっぱいに暗い静かな海がひろがり、かすかな波音が聞こえる。なんともいえない寂しさである。

ふと頭をかすめたのは、あの縄文人の女性もこんなふうに夕陽を眺めていたのか、ということだった。3500年前の船泊でも、アザラシの群れがのぞまれたろうし、ビノス貝はもとより、ウニも無数に見つかったろう。背景には深い森もあって、いまよりも楽園に近かったことはたしかだろう。

そんなことをぼんやり思いうかべながら食堂にもどると、テーブルにはすでに主菜の皿がならんでいた。

毛蟹――もちろん旨い。

ウニの茶碗むし――分量が少ないので妻にまかせずに食べた。生ウニに次いで旨い。

鮭汁――しみじみ旨い。

ごはんと漬物――ふつうに、旨い。

これだけ平らげて茫然としていると、女主人がふたたび登場し、こんどは大きな円形の菓子をテーブルに置いた。バースデイケーキだという。ひとしきり儀式めいたことがあってから、苺に飾られたその純白の円筒は小さく切りわけられ、会食者たちに配られた。妻も私もよろこんでこれをいただき、最後のコーヒーも楽しんだ。

たまにはこういうことがあってもよいだろう。部屋にもどっても腹いっぱい、身動きもむずかしい有様で、それでもまだあの切ない北の夕陽の記憶と、3500年前の高齢の女性の幻が目にうかんでいた。

プチホテル・コリンシアンから北の船泊湾へ、夕陽を見に行く人々。　撮影：筆者